

古代丹後の原風景



立岩

1 「丹後王国論」について

① はじめに

「丹後王国論」は、門脇禎二氏により昭和58(1983)年に提唱されたもので、非常に大きな反響を呼んだ学説です。門脇氏の説は、大和政権が確立される以前の弥生時代から古墳時代にかけて、京丹後市の峰山盆地を中心として、野田川・竹野川・川上谷川各流域を含めた地域に地域国家が存在していたというものです。

門脇氏は、王国や地域国家の存在について、次の三つの成立条件を挙げています。

1 地域における王権とその支配体制

2 画定された支配領域

3 独自の文化や支配イデオロギー

です。その上で門脇氏は、古代においていくつかの地域国家が形成されていたと考え、その中の一つとして丹後王国(タニハ王国)が存在していたと提唱しました。特に日本海沿岸では、出雲(イツモ)、丹波(タニハ)、若狭(ワカサ)、越(コシ)などの地域国家が存在したとしています。

② 丹後の首長の男系タテ系図



竹野神社

まず、一つ目の条件である地域における王権とその支配体制の存在について、門脇氏は『古事記』『日本書紀』の内容に丹後に関する記述が多いことに注目し、丹波（丹後）と大和政権との間の密接な関係を示すものと指摘します。あわせて『古事記』、『日本書紀』の内容から、丹後の首長の男系タテ系図を復元します。

『古事記』の系譜では、丹波大県主湯碁理たにはのおおあがたぬし ゆ ごりという現地豪族が登場します。その娘が竹野媛たかのひめであり、開化天皇の妃となります。竹野媛の子が比古由牟須美命ひこゆむすみのみこと（『日本書紀』では彦湯産隅命ひこゆむすみのみこと）です。

『日本書紀』では、姪津媛と開化天皇との間に生まれたのが彦坐王ひこいませうであり、彦坐王の子が丹波道主王たにはのみちぬしおうとなります。彦坐王（『古事記』では日子坐王ひこいませう）について、『古事記』の中では玖賀耳之御笠くがみのみかさを征伐したと記されています。門脇氏は彦坐王については、呼び名からみて実在の人物ではなく、神格化としての存在と指摘します。

では丹波道主王はどういう人物でしょうか。『日本書紀』には、崇神天皇すじんてんのうが派遣した四道將軍の一人として、丹後へ遣わされたと記されます。この記事によると、丹波道主王は大和朝廷から遣わされた大和出身の將軍ということにな

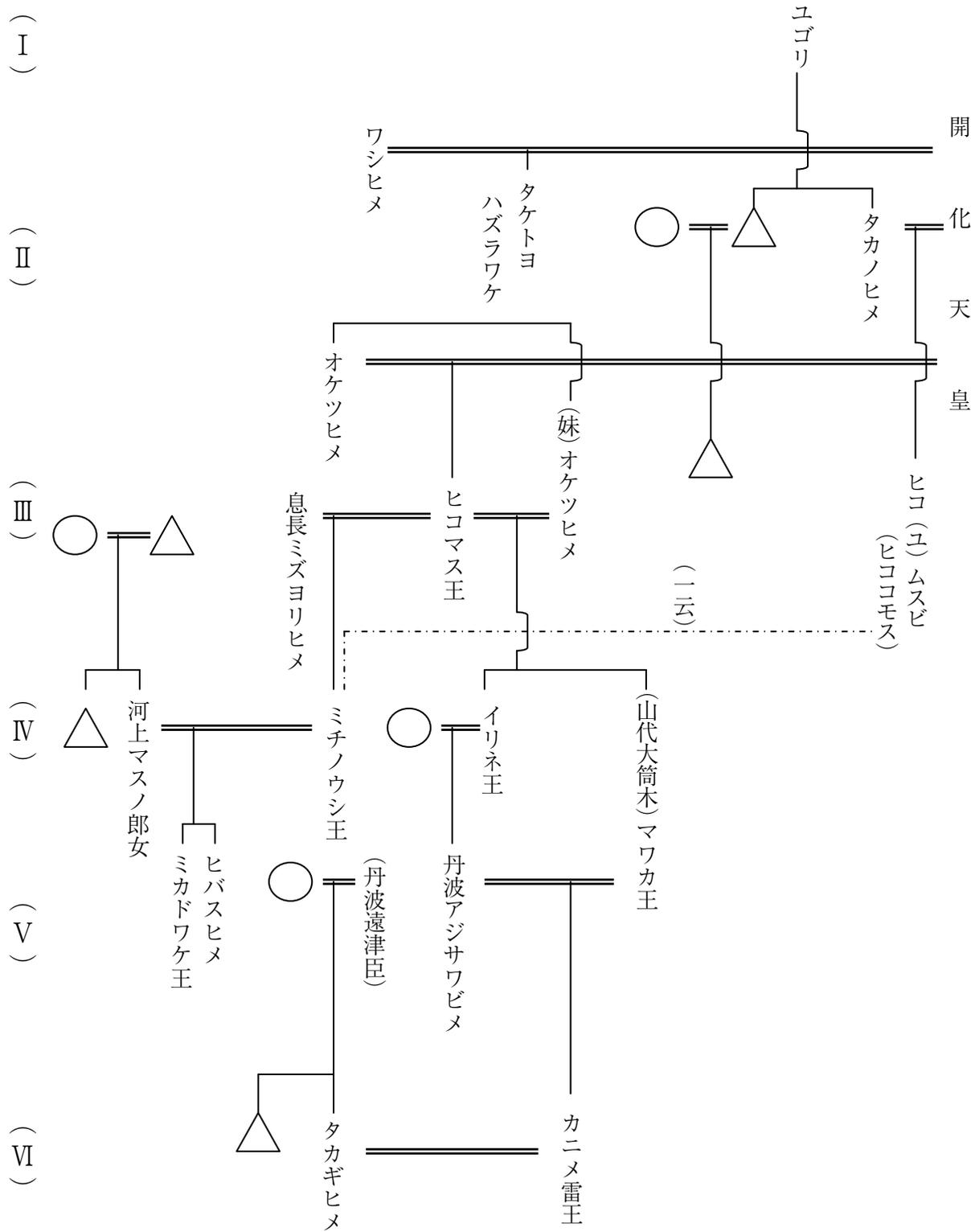
ります。しかし、門脇氏は後になってから、地方の首長の祖先を大和朝廷に結び付けたものと考え、丹波道主王を、丹波（現在の丹後・丹波）の有力な首長であったと考えます。『古事記』では、丹波道主王が河上摩須郎女かわかみませうのいらつめを娶って、三人の娘（比婆須比売命ひばすひひめのみこと、真砥野比売命まとのひめのみこと、弟比売命おとひめのみこと）と朝廷別王みかどわけおう（『日本書紀』では五人の娘 日葉酢媛ひばすひめ、淳葉田瓊入媛ぬばたのいりひめ、真砥野媛まとのひめ、薊瓊入媛あざみのいりひめ、竹野媛たかのひめ）を生むと記されます。三人（『日本書紀』では五人）の娘は垂仁天皇すいにんてんのうの後となり、日葉酢媛が皇后となります。あわせて門脇氏は、河上摩須郎女を川上谷川流域を支配していた首長の娘と推定します。

門脇氏は、さらにもう一つのタテ系図の復原ができるとします。『古事記』では、日子坐王ひこいませうと哀祁都比売命おけつひめのみことの子である伊理泥王いりねおうの子に丹波阿治佐波毘売たんばあじさばひめがあり、この女性と大筒真若おおつきまわか王との間に生まれたのが迦邇米雷王かにめいかづちおうで、その後は高材比売たかきひめとなります。なお高材比売の父親は丹波遠津臣たかきひめであり、野田川水系を支配する豪族と推定します。

以上のことから門脇氏は、三つの男系タテ系図が復原されることを指摘します。

- (1) 竹野川水系に、大県主湯碁理おおがたぬし ゆ ごり — 竹野比売たかのひめの兄か弟 — 比古牟須美命ひこゆむすみのみこととして形象化された人物 — 丹波道主王たんばみちぬしおう — 朝廷別王みかどわけおう、この五代にわたるタテ系図。
- (2) 川上谷川水系に、河上摩須郎女かわかみませうのいらつめの兄か弟とその父の少なくとも二代のタテ系図。
- (3) 野田川水系には、丹波遠津臣たかきひめとその子の高材比売たかきひめの兄か弟の二代のタテ系図。

このように古代丹波には、三つの男系タテ系図が復原されます。これにより、地域国家の一つ目の条件である王権とその支配体制について確認することができるとしています。



1 図 丹波関係略系図



竹野川河口旧潟湖



明治時代の網野銚子山古墳

③ 丹後王国の領域と潟湖の存在

二つ目の条件である画定された支配領域について門脇氏は、峰山町に丹波という旧国名と同じ地名が残されていることから、この丹波を核として竹野川流域を中心にした丹後王国の政治領域があったと推定します。また氏は、その領域について、西は川上谷川流域、南は氷上郡（現在の兵庫県丹波市）、東南は野田川流域におよんでいたと判断しています。

この支配領域については、発掘調査の成果、考古資料から推測します。その内容は、次の「遺跡・考古資料から見る丹後の原風景」において紹介します。^{あみのちょうしやまこふん}網野銚子山古墳（全長198m）、^{しんめいやまこふん}神明山古墳（全長190m）、^{えびすやまこふん}蛭子山古墳（145m）は丹後の三大古墳として良く知られ、ほかにも注目すべき多くの遺跡が丹後地域には分布しています。

これらの巨大古墳や特筆すべき遺跡が、丹後に存在する背景として、旧潟湖の存在が指摘されています。潟湖の存在は、森浩一氏が強調するものであり、日本海の波浪などにより日本海沿岸には、潟湖が形成されるとしています。丹後王国は、天然の良港である潟湖を背景として、朝鮮や大陸との玄関口、日本各地の交易の拠点としての役割

を担い、発展したと考えられています。

④ 独自の文化とイデオロギー

三つ目の条件は、独自の文化やイデオロギーが存在するというものです。この条件について、門脇氏は、丹後の弥生時代の^{ほうけいだいじょうほ}方形台状墓の墓制と丹後特有のトヨウケモチ神（伊勢神宮の外宮）の信仰に言及し、これについては、なお検討すべきところが多いと記しています。

このイデオロギーについては、門脇氏に対する批判や疑問視する意見も多くあります。丹波道主命の系譜がどこまで史実を反映しているのか、方形台状墓の起源は丹後と考えられるのか、トヨウケモチ信仰は、丹後に巨大古墳が築かれた4世紀後半から5世紀まで遡ることができるか。巨大前方後円墳は大和政権との深い結びつきがあったから築造しえたのではないかなどがその主な意見です。

以上のように門脇氏の「丹後王国論」は、さまざまな問題点をもちながらも、その後の研究に大きな影響を与えつづけてきました。現在でも「丹後王国」は、地域振興や観光の上で重要な役割を果たしています。

2 遺跡・考古資料から見る古代丹後の原風景

① 解明されてきた古代の丹後

丹後王国について、これまでは『古事記』、『日本書紀』という文献資料より見てきました。

次に近年の発掘調査を通じて明らかになってきた考古資料から、当時の丹後について見ることとします。考古資料から見ると、丹後が最も権勢を誇る時代は、^{あかさかいまいふんぼ}赤坂今井墳墓の築かれた弥生時代後期末葉から網野銚子山古墳、神明山古墳が築かれる古墳時代前期末から中期初頭にかけての時期であり、西暦では、2世紀末から4世紀末ないし5世紀初頭にかけての時代となります。特に、ここ20数年間における丹後国営農地開発、道路建設などの大型の開発事業に伴う事前の発掘調査は、多くの新しい発見があり、丹後地域の歴史が解明されてきました。

ここからは、弥生時代から古墳時代にかけての時間軸の中で、調査を通じて明らかにされてきた古代丹後王国の社会、原風景とでもいうべきものについて、特徴的な遺跡や考古資料を紹介することにより、イメージしていただきたいと思います。

② 弥生時代の丹後

○弥生時代のはじまり ^{たかのいせき りゅうすいもん どき}竹野遺跡の流水紋土器

近年の調査成果に伴い、古代の新たな年代観も示されていますが、これまでの年代観で、今から約2千数百年前にあたる集落遺跡として、竹野遺跡（丹後町竹野）があります。

竹野遺跡は、竹野川河口右岸の砂丘上にある弥生時代前期から中世にかけての集落遺跡です。昭和43年に発見され、特に弥生時代前期の



流水紋土器

遺跡として知られています。

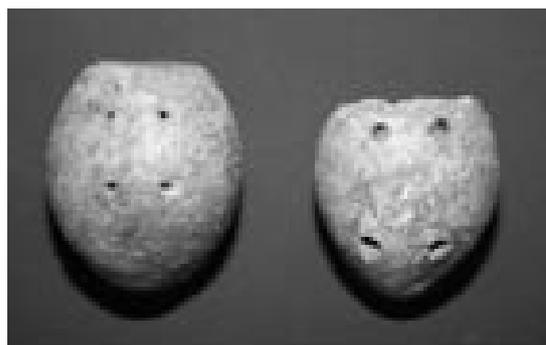
出土遺物として、^{へら}篋で描かれた^{りゅうすいもん}流水紋の模様のある^{つぼ}壺、^{もみがら}籾殻の^{あと}痕のある土器、貝殻文の模様の土器などがあり、日本海経由で弥生文化、稲作文化が丹後に浸透してきたことを示しています。

この遺跡は、古代の港としての機能を有していたと思われる^{せきこ}潟湖に面し、すぐ近くの神明山古墳と同時期の^{たてあなじゅうきよ}堅穴住居が見つかっています。

○^{とうけん}陶墳（土笛）の発見

弥生時代前期の楽器である^{とうけん}陶墳は、卵形をした土の笛です。吹き口のほか、6つの孔があり、その源流は中国に求められるものです。

現在、日本全国で日本海側を中心に約70個が発見されており、京丹後市で^{おうぎだにいせき}扇谷遺跡（1個）、^{とちゅうヶ おかいせき}途中ヶ丘遺跡（3個）、^{たかのいせき}竹野遺跡（1個）の合計5個が出土しています。



陶墳



扇谷遺跡環濠

この笛は海を通じて大陸からもたらされ、^{さい}祭礼の際に用いられた楽器と推定されます。

○高い技術を持つ弥生時代の高地性集落

^{おうぎだにいせき}
扇谷遺跡

弥生時代前期の高地性集落として、扇谷遺跡(峰山町丹波・杉谷)があります。

この遺跡は、丹後文化会館がある丘陵上に立地しており、昭和52年から10次の発掘調査が行われ、大規模な2本の^{かんごう}環濠が発見されました。内堀は850mに及び、幅4～6m、最も深いところでは4mを測る大規模なものです。

この^{ほり}濠の中からは、当時の人々が使っていた大量の弥生土器のほか、^{とうけん}陶埴(土笛)、玉作り道具、^{てつぱ}鉄斧、ガラス塊などが発見されました。独自の進んだ技術を有した集団が存在したものと推定されます。

またこの^{ようさい}要塞とも言うべき深い環濠の存在は、この時期、この地域に武力を伴う緊張関係があったことを示すものとして注目されます。

○日本最古の玉作り工房 ^{なぐおかいせき} 奈具岡遺跡

奈具岡遺跡(弥栄町溝谷)は、弥生時代中期、今から約2,000年前の玉作り工房跡として知られています。遺跡からは、水晶の原石、玉製品の材料や鉄製工具などが大量に発見されています。

九州北部地域よりも先に鉄加工の技術が伝来



奈具岡遺跡玉作り道具

していたものであり、当時の日本では先進的な技術を持った集団がすでに丹後に住んでいたといえます。

ここで作られた製品が運ばれた先は不明ですが、もたらされた鉄の原料などの代わりに、中国や朝鮮半島に渡ったのかもしれませんが。この遺跡は、丹後の先進技術をしめす注目すべきものです。なお出土遺物は重要文化財に指定されています。

○弥生時代後期の丹後の墳墓に副葬された大量の鉄製品とガラス玉

^{みさかじんじゃふんぼぐん} 三坂神社墳墓群、^{ささかふんぼぐん} 左坂墳墓群

丹後地域の弥生時代後期の墓制には、^{ほうけいだい}方形台^{じょうほ}状墓と呼ばれるものがあります。これは丘陵の尾根を削平し、平坦面を造成しそこに^{ほこう}墓壙(墓穴)を掘り^{もっかん}木棺を^{まいそう}埋葬するものです。



左坂墳墓群ガラス玉



豪華な頭飾り



赤坂今井墳墓

これらのお墓には、木棺を埋葬し蓋をした段階で、割った土器をばらまく葬送儀礼（墓壇内土器破碎供献）が行われます。また副葬品には、当時大変貴重であった鉄製品やガラスの青い玉を納めていました。

三坂神社墳墓群（大宮町三坂）からは多量のガラス小玉とともに一番中心となる3号墓第10主体部より、ガラス小玉・勾玉・水晶玉による垂飾りを持つ頭飾りや漆塗りの儀杖、鉄製品として、素環頭鉄刀、鉄鍬が出土しています（府指定文化財）。

また、左坂墳墓群（大宮町周枳）では、ガラス勾玉、ガラス管玉、ガラス小玉といったガラス玉が多量に発見されました。ガラス玉は両墳墓群あわせて総数約10,000個を数えます。

丹後地域の弥生時代の鉄製品の出土量は、極めて多く、日本全国でも北部九州地域について多い地域となっています。弥生時代は、日本で鉄を生産できる体制になかったため、当時の丹後地域の首長は、これらを手に入れる日本海側の交易ルートをもっていたことが伺えます。

○弥生時代後期の巨大墳墓と豪華なガラスの頭飾り 赤坂今井墳墓

赤坂今井墳墓（峰山町赤坂）は、弥生時代後

期末葉（西暦200年前後）の方形墳墓です。墳丘規模は、長辺39m・短辺36m・高さ3.5mを測り、国内最大級の弥生時代墳墓です。

第4埋葬施設からは、ガラス勾玉22点、ガラス管玉57点、碧玉製管玉39点を三連に連ねた豪華な頭飾りが出土しました。科学分析の結果、ガラス管玉の中には、古代中国で一時期のみ使用された顔料「漢青（ハンブルー）」が含まれていました。

中心となる第1埋葬は未発掘ですが、長辺14m・短辺10.5m・深さ2m以上を測る墓壇の大きさや、各地から持ち運ばれ供献された土器の存在から、まさに近畿北部を代表する「王墓」と評価されています。これらのガラスの遺物は、直接、中国からもたらされたものである可能性もあり、入手ルートについても関心が寄せられています。

③古墳時代の丹後

○青龍三年（235年）銘の方格規矩四神境

大田南5号墳（峰山町矢田・弥栄町和田野）は、長辺約20mを測る古墳時代前期の小さな方墳です。平成6年の発掘調査では、埋葬施設の



青龍三年銘 銅鏡



カジヤ古墳出土遺物



小銚子古墳出土丹後型円筒埴輪

くみあわせしきせつかん ふくそう
組合式石棺に副葬された銅鏡一面が見つかり、
魏の年号「青龍三年」(西暦235年)の銘があつたことから一躍有名になりました。

せいりゅう めいほうかくきく しんきょう
青龍三年銘方格規矩四神鏡は、直径17.4cmを測る船載鏡です(重要文化財)。

ぎしわじん でん や またいこく ひ
「魏志倭人伝」によると、邪馬台国の女王卑弥呼は青龍三年の4年後にあたる239年に魏に使いを送り、銅鏡100枚を与えられたと記されています。年号を記した鏡としては日本最古のものであり、三角縁神獸鏡とともに、卑弥呼がもらった鏡ではないかと論議を呼ぶ銅鏡です。

おおたみなみ ごかんせい がもん
また隣接する大田南2号墳は、後漢製の画文帯環状乳神獸鏡を副葬していました(府指定文化財)。両古墳は丹後地域の古墳時代の幕開けをつけるものとして重要なものです。

○豪華な石製腕飾り カジヤ古墳

カジヤ古墳(峰山町杉谷)は、古墳時代前期の長径73mを測る楕円形の古墳です。土砂採取に伴い昭和47年に偶然発見されました。埋葬施設は竪穴式石室、木棺など4基があります。

せきせいでかざ
出土遺物の中で注目されるのは、石製腕飾り
の鋏形石、車輪石、石釧です。これらは畿内の同時期の有力古墳に副葬されるものであり、丹後地域においてこれらがセットで見つかった

つがつたどうき
事例はほかにありません。このほか筒形銅器、
ほうかくへんけいしじゅうきょう
方格変形四獣鏡などが出土しました(京都府登録文化財)。峰山町丹波にも近く、古墳時代前期における丹後地域の有力首長墓に挙げられます。

○丹後の巨大古墳 網野銚子山古墳と神明山古墳

あみのちようしやまこふん しんめいやまこふん
網野銚子山古墳(全長198m)、神明山古墳(全長190m)は、古墳時代前期末~中期初頭(4世紀末~5世紀初頭)に築造された「丹後王国」を象徴する巨大前方後円墳です。蛭子山古墳(与謝野町)とともに丹後三大古墳に数えられており、蛭子山古墳、網野銚子山古墳、神明山古墳の順に築造されたと考えられています。

網野銚子山古墳は、古墳の範囲を確認するための発掘調査の結果、墳丘南東側に最大幅25mを測る周溝がめぐり、墳丘斜面の全面に葺石が葺かれ、頂部がドーム状を呈する「丹後型円筒埴輪」が樹立していたことがわかりました。網野銚子山古墳の「丹後型円筒埴輪」は底径30~40cm、高さ93~95cmを測ります。「丹後型円筒埴輪」を樹立した古墳は、網野銚子山古墳、神明山古墳、小銚子古墳が知られており、ほかに野田川水系の蛭子山古墳、作山1・2・3号墳、温江百合3号墳、鳴谷東3号墳、法王寺古墳(いず



網野銚子山古墳



神明山古墳

れも与謝野町) のわずか10基の古墳に知られるのみです。

この「丹後型円筒埴輪」は、古墳時代前期から中期初頭の丹後地域の首長墓を中心に樹立されるものであり、王国の条件となる独自の文化、イデオロギーになりうるものと考えられます。

線刻された埴輪が多いことも特徴です。網野銚子山古墳から出土した埴輪には『弓と矢』『龍』などが描かれており、神明山から出土した埴輪には『舟と櫂をこぐ人物』の線刻画が描かれています。これらは巨大古墳に葬られた首長の儀式的様子を現していると考えられます。

○潟と巨大古墳の立地

網野銚子山古墳、神明山古墳の立地は、福田川河口、竹野川河口の日本海を望む高所に築か



網野銚子山古墳と旧潟湖

れます。この、古墳が築かれた当時は古墳のふもとに潟湖が存在しており、両古墳は天然の良港があった場所を見下ろす位置に築造されていたことがわかります。

この潟の存在により、丹後地域は日本海を介して、中国・朝鮮あるいは日本各地域から船により物が運ばれ、交易の拠点としての機能を果たしてきたと推定されます。

網野銚子山古墳、神明山古墳という巨大な前方後円墳は、強大な権力を象徴するモニュメントとしての役割を持っていました。船に乗って潟へ入港してきた人々は、葦石を葺き、2,000本もの埴輪が樹立した古墳の姿を目の前にして、圧倒され、古代丹後の王の絶大な権力を実感したと想像されます。

○古墳時代中期の丹後の首長墓 黒部銚子山古墳

黒部銚子山古墳は、全長105mを測り、葦石、埴輪を持つ2段築成の前方後円墳です。発掘調査はされていませんが、古墳の残りは良好であり、墳丘の構造がよくわかるものです(京都府指定史跡)。

この古墳は、神明山古墳から南へ約5.2kmさかのぼった場所に築かれています。5世紀前半の築造と推定され、神明山古墳につぐ丹後の首



黒部銚子山古墳



離湖古墳石棺

長墓であると考えられます。

○古墳時代中期の長持形石棺 産土山古墳

竹野川河口左岸に築かれた直径55mを測る巨大な円墳です（国指定史跡）。墳丘は二段築成であり、葺石、埴輪を持っています。神社改築に伴って「王者の棺」とも呼ばれる長持形石棺が発見され、昭和14年に発掘調査が行われました。石棺内部からは埴製の枕、変形四獣鏡、玉類、環頭刀子、鉄剣、木弓などが出土しました。その後、平成8、9年に範囲確認調査が行われ、形象埴輪などが出土しています。

長持形石棺の材質は、畿内の石棺が竜山石で作られているのに対し、地元の凝灰岩が用いられているのが特徴です。荘厳な長持形石棺は、古墳時代中期前葉の丹後地域の首長墓にふさわしいものです。



産土山古墳石棺

○長持形石棺

長持形石棺は、古墳時代中期を代表する石棺であり、「王者の棺」と呼ばれます。底石1枚、蓋石1枚、長側石2枚、

短側石2枚の計6枚で構成されます。短側石は中央に突起を作り出し、蓋石、底石も繩掛突起を作り出します。

市内出土の長持形石棺は4例が知られています。産土山古墳（丹後町竹野）、馬場の内古墳（丹後町間人）、離湖古墳（網野町小浜）、願興寺5号墳（丹後町宮）です。丹後地域では法王寺古墳（与謝野町）を含めて5例が知られています。府内では、ほかに久津川車塚古墳（城陽市）が知られるのみです。丹後地域出土の長持形石棺の石材は、いずれも地元産の凝灰岩で製作されるという共通の特徴を持っています。

○丹後の女王の眠る大谷古墳

大谷古墳は、竹野川上流右岸の丘陵に築造された墳丘長32mを測る古墳時代前期末葉～中期初頭の古墳です。組合式箱形石棺からは、鏡、玉、剣の副葬品



大谷古墳石棺

とともに依存状態の良好な熟年女性の人骨が出土しました。



湯舟坂2号墳 環頭大刀



湯舟坂2号墳石室全景



遠處遺跡

この時期の当地域が女性首長の支配する地域であったことがわかり注目されます。

○黄金の飾大刀 湯舟坂2号墳

湯舟坂2号墳は久美浜町須田に所在する古墳時代後期、6世紀後半に築造された古墳です。埋葬施設の横穴式石室からは、全長122cmを測る金銅装環頭大刀が出土しました。

環頭大刀柄頭の内側には大小2対の龍が互いに玉をくわえています。その他にも未盗掘の石室内からは、埋葬当時のままの姿で銀装圭頭大刀、馬具、耳環、銅椀、土器などが出土しました（重要文化財）。

川上谷川流域を支配した豪族が眠る古墳と思われ、環頭大刀は、ほかに高山12号墳（丹後町徳光）や岡1号墳（網野町小浜）からも出土しています。

○古代の製鉄遺跡 遠處遺跡

遠處遺跡（弥栄町木橋、鳥取）は、古墳時代後期、奈良時代の製鉄炉跡、鍛冶炉跡、木炭窯跡などが見つかった古代製鉄遺跡です。

鉄は武器、農具、加工道具などに使用されてきました。古代社会では、鉄製の道具により生産性が飛躍的に増大したと考えられ、その原料となる鉄の生産は極めて重要なものです。

鉄の生産技術は最先端技術であり、まさに社会変革をもたらすと言っても過言でないものです。この遺跡の発見により、古代の丹後地域は製鉄コンビナートともいべき工業先進地だったと考えられます。

④ その他の重要な遺跡

京丹後市内において確認されている遺跡は、約1,200箇所あります。また古墳の総数は6,000箇所以上にのぼります。これまでに紹介したほかにも「貨泉」が出土した函石浜遺跡（久美浜町箱石）、古墳時代の水祭祀遺物が見つかった浅後谷南遺跡（網野町公庄）、墳丘長51mを測る前方後円墳である岩ヶ鼻古墳（久美浜町甲山）、舟形石棺や組合式石棺を有する古墳時代中期の願興寺古墳群（丹後町宮）、舟形埴輪、鉄製甲冑などの遺物出土したニゴレ古墳（弥栄町鳥取）や陶質土器の出土で知られる奈具岡北1号墳（弥栄町溝谷）などがあります。

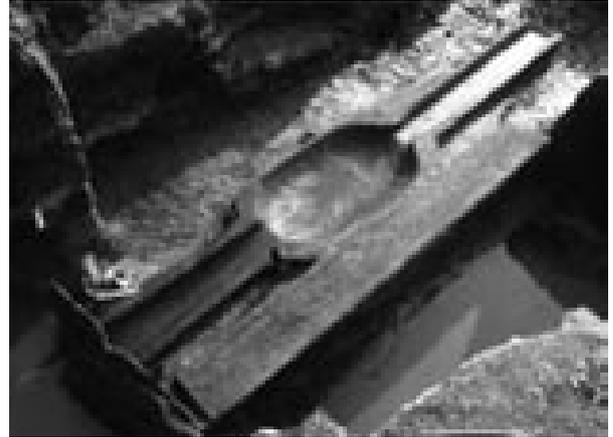
以上は京丹後市内の遺跡ですが、古代丹後王国の領域はさらに広いエリアであると想定されています。弥生時代後期の大風呂南1号墓（与謝野町）からはガラス釧、銅釧、鉄剣などの多くの副葬品が発見されています。日吉ヶ丘遺跡



ニゴレ古墳舟形埴輪

(与謝野町)は、弥生時代中期の環濠集落です。この集落には、長辺32m、短辺20mを測る方形貼石墓があり、組合式木棺の棺内からは670点を超える管玉などが出土しています。

また丹後地域では、弥生時代の代表的な遺物である7点の銅鐸が発見されています。梅林寺銅鐸(与謝野町)は、高さ1.07mの大形の弥生時代後期の銅鐸です(重要文化財)。



浅後谷南遺跡木製槨

古墳時代前期の白米山古墳(与謝野町)は墳丘長92mの前方後円墳です。葺石を持ち、丹後地域で大田南2、5号墳につぐ初期に築造された首長墓です。直径65mの温江丸山古墳(与謝野町)には堅穴式石室が築かれ、三角縁神鏡、方格規矩変形獣文鏡などが出土しています。

3 丹後の伝説、伝承

① 魅力的な丹後の伝説、伝承

『古事記』、『日本書紀』には丹後地域にかかわる多くの内容が記されています。これ以外にも丹後地域には多くの伝説、伝承が伝えられています。これらは時代の変化、時間の経過とともに内容が変化したり、付け加えられたりしているほか、後の時代の中で新しく創られたものも存在すると思われます。また、これまでみてきた重要な遺跡が示すように、古代丹後に存在した強大な王権と関連する内容も多く含まれると考えられます。

それらの伝説、伝承の示す内容は、事実をそ

のまま示しているのではなく、ストーリーも誇張されたり、時の権力者にとって都合よく改変されているものもあると思われます。

『古事記』、『日本書紀』についても同様のことが言われています。しかしながら、記紀に記されている丹後地域にかかる内容が、あなたが創り話でないことは、丹後における巨大古墳の存在や、銅鏡などの考古資料が如実に物語っています。

豊富な丹後地域の伝説と伝承は、それ自体が魅力的なものです。伝説、伝承と関係のある資料も伝えられており、丹後の歴史の中では重要な資料といえます。

ここからは、丹後の伝説、伝承について紹介するものとします。これらの伝説、伝承の成立年代は不明のものが多いです。しかし、そこには背後には、深い意味が込められていると思われる、極めて魅力的なものであるというのが正直な感想です。



久美浜湾小天橋

②『丹後国風土記』が語る羽衣天女

風土記は、奈良時代の和銅6(713)年に元明天皇により詔みことりが出され編さんされたものです。国内の産物や民俗、伝承などがその対象とされました。風土記は、完全な形で現存するのは少なく、『丹後国風土記』についても後世の史料に引用されて残る逸文いつぶんとして「奈具社」「天橋立」「浦嶋子」が知られています。

奈具社において描かれるのは、羽衣天女の伝承です。比治山の真奈井という池で水浴する8人の天女の1人が羽衣を隠され、和奈佐という老夫婦の子となります。天女はどんな病をも治すという酒を造り、老夫婦は裕福になります。しばらくして和奈佐の老夫婦は天女に対して、自分たちの子供でなく家を出るように天女に告げます。天女は天を仰ぎ嘆き悲しみ、歌を詠みます。

天あまの原かすみふりさけみれば霞立いえじ
家路いえじまでいて行方ゆくえし知らずも

天女は家を出て、荒塩村、丹波里哭木村(峰山町内記)を経て船木里奈具村(弥栄町船木)にいたり、わが心なぐしくなりぬとて、この村に住み着くこととなります。そして最後に天女は奈具社に祭られる豊宇賀能売命とようかのめのみことであると結んでいます。

この最後の結びにより、この物語は丹後に伝わる伝説を超え、背後に潜む政治的な意味を類

推させます。豊宇賀能売命とようかのめのみことは丹後地域の多くの神社に祭られる女神のことであり、伊勢神宮の外宮げぐうに祀られる神です。祭神が遷座せんざされるということは、政治的な大きな変革を背景としていたものと容易に想像されるところです。

そして羽衣天女が最後に暮らした奈具村は、弥生時代中期に玉作りが行われていた奈具岡なぐおか遺跡いせきの近くにあたり、興味深い伝説です。

③『丹後国風土記』が伝える浦嶋子

『丹後国風土記』には浦嶋子の物語も描かれています。日本で最もよく知られている昔話の浦島太郎の原像です。

与謝郡日置の里に筒川という村があり、嶋子という日下部氏の祖先にあたる若者が住んでいました。雄略天皇の時代に嶋子は舟にのり釣りに出かけました。三日三晩たっても魚が釣れず、かわりに五色の亀がかかりました。舟に引き上げて、嶋子は眠ってしまいます。するといつのまにか亀が乙女となりました。

二人は海に浮かぶ大きな島に着きます。大きな御殿がそびえ、そこでたのしい宴をすごします。二人は夫婦となり、3年の歳月がたちました。嶋子は故郷をなつかしく思い出すように



奈具神社



島児神社

なり、帰りたいと乙女につげます。出発の日、乙女は玉匣たまぐしげを嶋子に渡しながらいいます。「わたしのことを忘れないでください。ここに帰ってこようとするならば、この玉匣は開けてはだめです。」乙女に別れを告げ筒川の里につきました。

人も村も変わり、見覚えのあるものはありません。村人に尋ねると、水の江の浦嶋子という人が三百年前に一人海に出かけて戻らなかったというのを聞いたことがあると告げられます。嶋子は約束を忘れて、玉匣を開けました。すると、かぐわしい蘭（らん）のような乙女の身体が雲となって立ち上がり、風に流され青空のかなたに消えてしまいました。この浦嶋子の話は、『日本書紀』にも「丹波国余佐郡の筒川の瑞江浦嶋子、船に乗りて釣す。遂に大亀を得たり。たちまちに女になる。」と記されています。

この浦島伝説は浦嶋神社（伊根町）に伝えられ、日本で最も古い浦島伝説と考えられます。市内では、網野町網野から浅茂川、下岡にかけて、嶋子を祀る島児神社・網野神社・六神社があり、浦島伝承が伝わっています。

④ 田道間守の伝承

網野町木津には田道間守の伝承が伝えられ

ています。田道間守は、垂仁天皇すいにんてんのうの命により、非時の香菓ときじくかぐ（不老不死の香菓）を探しに常世の国へ旅立ちます。彼は香菓を持ち帰り最初に流れ着いたのが、網野町木津の浜で非時の香菓たちばなとされています。

田道間守は垂仁天皇が亡くなったことを知り、持ち帰った香菓の半分たいこうひはばすひめを大后日葉酢姫に捧げ、天皇の墓前に報告し自ら命を断ったと伝えられています。

木津の隣の集落である俵野たわらのには、丹後地域で最も古い白鳳時代の寺院、「俵野廃寺」が確認されており、発掘調査の結果、塔の礎石や鬼瓦、軒丸瓦のきまるがわら、軒平瓦のきひらがわらなどが出土しました。

これらの伝承や寺院の存在は、この地域が古代において重要な場所であったことを示しています。

⑤ 海部直、丹波道主王の伝承

丹後地域の海岸部で古代において活躍した海人一族にまつわる伝承も伝えられています。

海部直あまべのあたいかわかみのしょうかいべのさとは川上庄海部里（久美浜町海士と推定）を国府とし、館を造ったと伝えられ、古代において久美浜を中心に航海に長けた海部氏が活躍していたと推察されます。

また、丹波道主王は四道將軍として丹波を平

定した後、剣を天照大神に奉り、この地に太刀宮を造立しました。この「くにみのつるぎ国見剣」からこの地を「くみ国見の庄」と名づけ、これが久美浜の地名の由来と伝えています。

四道将軍とは、北陸道におおひこのみこと大彦命、西海道(今の山陽)にきびつひこのみこと吉備津彦命、東海道にたけぬなかわわけのみこと武渟川別命、山陰道のたんばみちぬしのみこと丹波道主命を派遣し、不服の民を平らげ辺地の守りを固めたと『日本書紀』に記されます。

これらの内容が示すように大和政権が、日本を統一する過程において、大規模な武力による制圧が行われたことは想像されるところであり、あるいは丹後地域においても、同様の歴史があった可能性を表していると推定されるところです。

⑥ 麻呂子親王の鬼退治と丹後七仏薬師伝承

麻呂子親王の鬼退治の伝承は、広く丹後地

域に伝えられている伝承であり、「せいおんじ清園寺縁起」「とうらくじ等楽寺縁起」「いつきみょうじん斎明神縁起」などの絵巻や麻呂子親王が像造した七仏薬師如来と伝えられる仏像などが存在します。また江戸時代まで、丹後町竹野、宮地区では、鬼祭などが行われていたことも知られています。このように麻呂子親王の伝承は、伝承のみならず文化財としても優れたものを伝えています。

麻呂子親王の鬼退治の内容について、「斎明神縁起」の内容から紹介すると次のようになります。聖徳太子の異母弟の麻呂子親王が弟のしおほし塩干親王、まつえだ松枝親王とともに推古天皇の勅命により、みうえがだけ三上ヶ岳にすみ、人々を苦しめている三匹の鬼、えいこ鱧古、かるあし軽足、つちくるま土車を薬師如来の加護により成敗し、丹後に薬師如来の霊場を建立するというものです。2匹の鬼の首領である鱧古、軽足は殺し、土車は後世の証として鬼の岩屋へと封じ込めます。その戦いにおいては白犬や鏡、名馬が活躍し、絵巻にはうまほり馬堀やほとけだに仏谷、願興寺の鏡の松などの地名の由



夕日ヶ浦



神谷神社



斎明神縁起

来も記されています。

現在、絵巻として伝えられているものに上述の三つの資料があり、その内容が時代と共に、変容してきていることを見ることができます。例えば最も新しく製作された「斎明神縁起」には、伊勢参りや同じような話である源頼光の酒吞童子の物語の影響を受けたと思われる箇所があります。

また、丹後の七仏薬師信仰が語られており、薬師信仰の中でこの物語が作られたものであるという見方もあります。麻呂子親王という固有の皇子が登場しますが、伝承の内容からは、推古天皇の時代とするには、疑問があります。斎明神縁起より古い等楽寺縁起においては、単に王子とのみ記されていることから判断して、もとの伝承は中央政権の王子が鬼を退治したとして伝えられていたと推定されます。またこの伝承が、薬師信仰において大きな役割を果たしたことも見逃せません。

しかしながら、この物語が薬師信仰の中で創作されたものだけというのではなく、丹波道主たんばみちぬしの命みことや日子坐王ひこいますおうの豪族の平定の記事にみられるように、この伝承のもととなる伝承が、すでに丹後に広く語り継がれ、存在していたと考えたいと思います。

想像をたくましくするならば、鬼の正体は、かつて丹後を広く支配していた丹後の王そのも

のだと理解される場所です。しかしながら、現在それを裏付ける資料がなく、今後の考古資料や新資料の発見に期待するものです。

⑦ その他の丹後の伝承

これら以外にも丹後には多くの伝説、伝承が伝えられています。聖徳太子の母親である間人はしひと皇后こうごうの伝承は、間人の地名説話となっており、近世後期の資料に出てきます。徐福じょふくの伝承も丹後には伝えられています。秦の始皇帝は不老不死の薬草を探すように徐福に命じ、徐福は薬草を求めて船で旅立ちます。新井崎神社にいざきじんじや（伊根町）は、徐福を祭神としています。

また、製鉄に関連があると思われる地名は、丹後地域に広く見られます。大蛇や龍、白鳥伝説なども見られ、古代製鉄との関連などが指摘されている場所です。

これらの伝承のなかには、近世以降に成立するものも含まれており、必ずしも同時代の史実を投影したものではないことも事実です。

しかしながら、これらの伝説伝承が古代丹後の原像のヒントを提示してくれることもまた事実であり、そういう意味において丹後の伝説、伝承は魅力に富んでいます。